「比較表現論 | を担当して

人文学部 斉 藤 陽 一

初めにお断りしておかなければならないが、「比較表現論」は人文学部の科目である。その経験をこの年報に掲載することには異論もあるかもしれない。が、筆者はこうした種類の科目がむしろ教養教育の段階で開講されることが望ましいのではないかと考えているので、あえて掲載した次第である。なお、このことについてはこの報告の終わりでまた触れたいと思う。

さて、名称、形態はどうあれ、演劇を大学の授業に 取り入れようと決めたのは、ある観劇の後であったと 思う。現担当者の2名が、見たばかりの演劇について 語り合ううちに、「最近の学生は、戯曲を訳読するとき でも、とても会話の言葉とは思えないように訳して平 気でいる。」などという話になった。だから初めは外国 語教育とこの科目を結びつけたいという気持ちも若干 あったような気がする。そして私がこう考えたのには もう一つ理由があった。それは、10年近く続いていた ロシア語中級クラス(当時は乙クラス)によるロシア 語劇上演の伝統を、私がストップしてしまったことを 悔いていたからだった(これは人文学部の川崎教授が 始められ、私の前任者の現在埼玉大の沢田先生がそれ を継ぎ、私が3代目だった)。演劇の授業をうまく利用 してロシア語劇の上演も復活できないか、などと言う ことも当時は考えていたのだ。

検討するうちに、演劇だけというわけにもいかないだろうから、ジャンルにはとらわれずに、広く芸術表現を扱ってはどうだろうか、ただしただの講義ではなく、学生が参加するというスタイルでやろう、担当も永久に同じ人間がやるというわけにも行かないから言語表現も含めて幅を持たせてやろうということで、「比較表現論」という授業科目が、言語学の担当者を責任者として成立した。そして、実際の授業担当者は、言い出した2人、つまり観劇の後で話し合った科学史の井山教官と本来ロシア文学を専門とする私となった。

1年目は試行錯誤の連続で、ともかく様々なテキス

トを声に出して読むということから始め、夏期休暇までそれを続けた。読んだものは戯曲だけではなく、自作のテキスト、ただ「愛してるよ」という一言とか、或いは、詩を音楽に合わせて朗読するということもやった。また、台詞を言うときに体の動きをつけたり、物を渡したりというようなことも試みてみた。なお、この時点で何回か、当時教養部の栗原教官にも加わっていただいて、興味深いテキストを教えていただいたりした(栗原氏には、2年目、3年目の上演の際にも協力していただいた)。

9月からは実際に一つの戯曲を読み込むという作業に入り、井上ひさしの『イーハトーボの劇列車』を1場ずつ丹念に読んでいった。この段階では学生たちもかなり積極的になり、他の学生の演技への意見も出始め、一つの台詞をめぐっての議論も行われるようになった。これは、授業担当者のうち私だけの感想かもしれないが、自分の担当する他の授業に比べ、学生が自分の意見を述べる機会が非常に多かったように感じられる。その理由として思い当たるのは、一つには、体を動かすということが、机に張り付いて受ける授業に比べて体を柔らかくし、さらに心を開かせたということ、もう一つは、教員が専門家として、絶対的な権威者として学生の前に立ちふさがる普通の授業に比べて、学生が自らの体験を武器にして語ることが容易であったということであろう。

結局1年目はこの後、別役実『或る別な話』をテープに吹き込むというところまで行ったが、実際に舞台で芝居をするということはできなかった。もちろん、実際に芝居をするには場所の問題が大きかったし、また普段の授業の場所も演じるには不都合な所で、これをどう解決するかが次の年からの課題となった。

さて、2年目はいきなり戯曲を与えて演じることから始めたことが功を奏したのか、集まった学生が積極的だったのか、学園祭で谷川俊太郎の戯曲『部屋』を

授業参加者の一部で上演、その余勢を駆って2月には 学外の小劇場で発表会、安部公房の『友達』を上演し た。上で述べた場所の問題は、学園祭で上演という形 で解決し、学生たちの熱意が教師を動かして外部の小 劇場を借りるというところまでいったのである。

2年目の前半は、自分でシチュエーションを決めて、 歩いたり、物を見つけたり、人と出会ったりといった、 かなり実際の芝居の稽古に近いものを中心にした。ま た、「笑い」や「怒り」を段階を付けて表現するとか、 日常的な行為を意識化する訓練も多くなった。後半は、 一部の学生は『部屋』の上演に取り組み、その他の学 生は、寸劇を演じることで演技に慣れ、『友達』の上演 につなげていった。本を読まないと言われる現代の学 生だが、いきなり謎だらけの戯曲を渡されて自分なり の解釈をする事を迫られる。何しろ、演じてそれを見 る観客にわかってもらわなければならないのだ。当然、 他の役者から意見も出るし、ディスカッションをしな ければならなくなる。言葉の意味や、その戯曲が書か れた社会的、歴史的背景にまで踏み込まなければなら なくなることもある。実際に稽古をしていたときには 思いつかなかったことだが、いわゆる不条理劇の系統 の戯曲を選んだことが今にして思えば良かったよう だ。簡単には意味がつかめない戯曲であるために、あ れこれと議論が繰り返された。こうした戯曲を選んだ のは井山氏の功績である。

3年目の今年は、だいたい2年目と同じスケジュールで授業が行われた。学園祭での上演は、授業のメンバーからはかなり独立して、学生の自主的な公演になった(寺山修司『犬神』)。2月の上演は、やはり外部の小劇場で、別役実の『ジョバンニの父への旅』であった。

今年は他学部からの聴講者もおり、工学部の学生は 機械に対するマニアックな関心を見せ、例えば音響の 面で様々な器具を用いて効果を上げ、人文学部の学生 たちを驚かせた。逆に、細かい表現まで注目して戯曲 を読み込んでいく人文学部の学生には彼の方が驚かさ れていたようだった。

さて、最後にこの報告をこの年報に掲載させていただいた理由について、まとめておきたいと思う。大学に入学したばかりの学生は、高校、或いは予備校での、大学に合格するための知識をとりあえず詰め込むという授業に慣れているであろう(もちろんそうでない学校、学生も存在するであろうが)。自分の意見を発信していく、或いは自発的に調べるという行為を必要とするこのような形態の授業は、むしろ教養段階で行い、学生に「大学は高校とは違う」という印象を持たせる方がよいのではないだろうか。

勿論、こうしたことが学生にとって苦痛であるならかえって逆効果であるが、共同である物を創っていくという行為には学生達も喜びを感じるらしく、教師の指導以上に自主的に取り組んでいくことが多かった。例えば、今年の2月に上演した戯曲は、表題からもお分かりのように宮沢賢治の作品を下敷きにした物だが、かなりの学生が教員が指摘するまでもなく賢治の作品をいつの間にか読みなおして、戯曲の台詞の解釈に役立てていた。そして、稽古を重ねるうちに、そうして得た知識を互いに披露し合いながら、自分の表現能力を高め、かつ全体の演技の水準を高めていったようだ。

このような授業は、どんな学生にも有効か?と問われれば、否定的な答をせざるを得ない。教員の力不足もあって、かなりの学生が途中から出なくなってしまうが、このようなある意味では掴みどころのない授業について行けない学生も必ずいるからである。そもそも、本当の役者になる学生は滅多にいないわけであるから、授業としてはどこまでやることが最大多数の新潟大学生にとって必要なのか、それを見つけることがこれからの課題だろうと考えている。